

Be like Parentheses への誘い —Trying to a deconstructive reading in *Recitatif*—

石井 澄子
日本大学総合社会情報研究科

Invitation to “Be like Parentheses” - Trying to a deconstructive reading in *Recitatif* -

ISHII Sumiko
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The following is trying to a deconstructive reading in *Recitatif*, which is the only short story in Toni Morrison's works. Deconstructive reading attempts to "hear" many of the different "voices" in certain pivotal Western philosophical and cultural texts, without classifying them into binary oppositions or hierarchies.ⁱ

We are hearing three voices while we are reading this work. There are Twyla, Roberta and Toni Morrison; narrator, story teller and writer. Their voices guide our questions to come out. Therefore we will have to reconsider our value of races and on the top we will accept our tensions and ambiguity.

はじめに

*Recitatif*ⁱⁱは Toni Morrison が書いた作品の中で唯一の短編にあたる。しかし残念なことにこの作品に関して多くの批評家たちはあまり注目していない。それは短編というジャンルに対しての先入観、そして世にあまり知られていない編纂集の一つとして発表されたことにあるだろう。しかしこの作品は他の作品と比べ引けをとらないほどの秀作なのだ。

この作品は主要作品である 1981 年 *Tar Baby*、1986 年 *Beloved* が書かれる間である 1983 年に発表されている。この 5 年間に執筆した文学作品はこれのみで、残りのこの期間の彼女の文学活動は編集者としての関わりだけしかない。またこの作品に対し Toni は作者としての立場で目立ったコメントをよせていない。これはまるでこの作品は作者と読者との間でその意味が変容しないかのように思われるのである。

ここでは、この作品を唯一批評している David Goldstein-Shirley が次に言うように

In any case, as Morrison herself has said, “Recitatif” puts into play the very themes and rhetorical devices for which her novels have been recognized. In fact, “Recitatif” can be viewed as a nineteen-page distillation of Morrison's grand project of deconstructing race and racism, which characterizes her remarkable oeuvre.ⁱⁱⁱ

をひとつの読み方として捉えなおしてみたい。レトリックを用いて人種とその差別の「脱構築」を試みているということは彼女の作品全体の特徴でもあるのだ。この「脱構築」というツールを客観的に利用することで作者と読者はテキストという通過点をどのように捉えることができるのか。また「脱構築」後、どのような作品の読みが現れてくるのだろうか。検証してみたい。

1.Salt and pepper standing there

この作品の主要登場人物である二人の少女、Twyla と Roberta は“...it didn't matter that we looked like salt

and pepper standing there and that's what the other kids called us sometimes.” (244)

と語られる。この salt and pepper はあきらかに白人と黒人であることを意味しているように思われ、読者はこのテキストに従い、この二人の**どちらが白人であり黒人であるのか**特定しようと物語のナレーター（言説）はもちろんストーリーテラー（内容）から察する努力を始める。この作品の始めの方に書かれたこの文章は、読者側の最初の問いであるため、白人と黒人の特定はテキストの全体を通してそれが決定されるまでその証拠探しく**シンボルハンティング**に我々は終始していくことになる。この<シンボルハンティング>を通して読者は否応無しに Twyla と Roberta の二人の役割である、テキスト内ナレーター（言説）とストーリーテラー（内容）の2つを注意深く意識しながら読み通す課題を作られてしまったのである。

出会い

Twyla の母親はダンスに興じて子供の面倒を見ることができないために、Roberta の母親は病気がちのために二人は孤児院施設に預けられることになった。他の施設内の子供たちは両親がいない孤児であり、二人は片親でもいるということからその孤児らから仲間に受け入れてもらえない。そのような中で二人は急接近し友人になるのだが、しかし初めてお互いが出会う時のことである。

Every now and then she [Twyla's mother] would stop dancing long enough to tell me something important and one of the things she said was that they never washed their hair and they smelled funny. Roberta sure did. Smell funny, I mean. (243)

Twyla は Roberta たちが決して髪を洗うことがなく、変なおいがすると母親から聞いたことがあるのだが、その通りだと彼女は思う。確かに黒人のドレッドヘアはヤシの油を念入りに塗りこみ洗髪はあまりしない。このことからまず初めに我々読者は Roberta が黒人だろうと考え、また Twyla が Roberta と初めて出会った時、二人が同じ部屋になることを Mary

(Twyla の母親) は良く思わないだろうと言い、Roberta もそれに反論しない。このことから我々は Twyla が白人だと考える。

しかし Roberta が Twyla とその母親を紹介しようとした時のことである。

“Mother, I want you to meet my roommate, Twyla. And that's Twyla's mother.” ...Mary, simple-mind as ever, grinned and tried to yank her hand out of the pocket with the raggedy lining — to shake hands, I guess. Roberta's mother looked down at me and then looked down at Mary too. She didn't say anything, just grabbed Roberta with her Bible-free hand and stepped out of line, walking quickly to the rear of it. (247)

Twyla の母親が手を出し握手を求めたにもかかわらず Roberta の母親は二人を見下し何も言わず無視して列の最後に加わってしまう。我々は黒人が白人に対してこれほどまでに高圧的な態度を取るだろうか？と考え、Twyla は白人ではないかもしれないと考える。

しかし二人は親たちの反目を他所に施設ではいつも一緒にいるようになる。その中の思い出のひとつとして施設で食事の賄いをする Maggie が他の子供たちからいじめられる姿を目撃するのである。

8年後

Twyla が高速道路沿いの珈琲ショップで働いている時に二人は再会する。二人の容姿は

Her [Roberta] own hair was so big and wild I could hardly see her face...She had on a powder-blue halter and shorts outfit and earrings the size of bracelets. (249)

I [Twyla] was standing there with my knees showing out from under that uniform. Without looking I could see the blue and white triangle on my head, my hair shapeless in a net, my ankles thick in white oxford. (250)

である。Roberta の髪は大きく野性的であることはわかるが Twyla は勤務中の為に髪はネットに仕舞い込まれ三角帽子しか見ることができない。なので Roberta の髪型を想像してみる。60 年代初めのファッションを考慮すると Roberta の顔が見えない大きな髪はアフロヘアなのではないかと推測できる。が、彼女がジミー・ヘンドリックスに会いに行く途中であることから白人の女性であってもおしゃれとして髪を大きくセットする人もいるかもしれない。また当時、黒人であるジミー・ヘンドリックスは白人であろうとも黒人であろうとも多くのファンを獲得しているのでこの推測も危険だ。

“Hendrix? Fantastic,” I said. “Really fantastic. What’s she doing now?”

Roberta coughed on her cigarette and the two guys rolled their eyes up at the ceiling.

“Hendrix. Jimi Hendrix, asshole. He’s only the biggest — Oh, wow. Forget it” (250)

ジミー・ヘンドリックスを知らない Twyla に Roberta は説明を途中でやめてしまう。おそらく biggest の後ろにつく言葉は Black Guitarist だったのではないだろうか。Roberta は Black という言葉を使うことをやめた理由、Twyla が白人であるために自分と同じものを分かち合えないと感じたのではないか。Twyla が白人なのはほぼ確定に近くなる。

12 年後

二人はグロッサリーストアで再会する。

...her huge hair was sleek now, smooth around a small, nicely shaped head. Shoes, dress, everything lovely and summery and rich. I was dying to know what happened to her, how she got from Jimi Hendrix to Annandale, a neighborhood full of doctors and IBM executives. Easy, I thought. Every thing is so easy for them. They think they own the world. (252)

消防士の妻になった Twyla は Roberta の裕福そうな

姿や生活を見て「彼らにとってすべてがあまりにも簡単なのだ。彼らはこの世界を所有していると考えている」と嫉妬する。

1968 年公民権法が制定された後、1970 年代に入ると黒人の生活は多方面で向上され、地位や仕事など全体的に改善された。専門職・管理職などに多くが採用され始めたのだ。時代的な背景から考えると彼らの社会進出は白人からみれば Twyla のように考えてもおかしくはないだろう。

二人は買い物を終えて珈琲ショップで昔の思い出話をする。Twyla はどうしても Roberta が取った the Howard Johnson (高速道路沿いの珈琲ショップ) での冷たい態度が気になり尋ねる。何故、施設にいる間、髪を梳かすことも顔を洗うことも身なりをきちんとそろえることも一人で出来なかった Roberta の面倒を見てあげたのに、その恩を忘れたかのように、またそれを否定するかのようにあの場を去った理由が知りたかったのだ。

“Oh, Twyla, you know how it was in those days: black — white. You know how everything was.”

But I didn’t know. I thought it was just the opposite. Busloads of blacks and whites came into Howard Johnson’s together. They roamed together then: students, musicians, lovers, protesters. You got to see everything at Howard Johnson’s and blacks were very friendly with whites in those days. (255)

Roberta は人種が違うから冷たい態度を取ったという Twyla にはそれがわからない。あの時でも黒人は白人にとっても親切だったはずなのだ。何故それを意識するのか？ Twyla はわからない。

我々はこのように純粋に考える Twyla が黒人なのではないかと思いは始めるが、しかし“opposite”という言葉は白人・黒人、2 元の対立であって両者の人種の特定ができる言葉ではない。我々は人種の特定が出来ないと判断した瞬間、テキストは二人の人間としての価値観の対立へとシフトしていることに徐々に気がついてくる。

数ヵ月後

今度は人種統合教育をめぐって二人は対立する。Roberta は統合教育政策から子供たちを守るためピケを通して反対するが、Twyla は現在も子供はバスで通学していることに変わらないのでどこの学校へ行こうと構わないと考えている。しかし子供が通う学校の選択権を寄越せとピケをする母親たちに対して、施設にいた先生である Bozo のようだと言われ、非難する。親の意見だけで子供の意見など聞き入れず牛耳ろうとしている姿が、大人という立場だけで子供たちを縛り付けていた Bozo と同じなのではないかと Roberta に言うのである。Twyla は子供に選択肢を与えない大人の勝手な行動が許せない。

法でたとえ決められたことであっても、自由の国に住んでいるのだから親に選択権を寄越し、行使させろとピケをやるように執拗に Twyla に薦める Roberta。未来は自由の国になるかもしれないが今は自由ではないという Twyla。どちらも白人にも黒人にも取れる意見であり、現在もこの統合教育に関しての問題を人種関係なくアメリカは抱えている^{iv}。これは母親が子供をどのように愛するかという価値観の対立なのである。

我々はそのような二人の親としての対立を読みながら、しかし少しでも人種の特定が出来る言葉がないかとテキストと自分の思考内を駆けずり回り移動している中、いよいよ人種に関する言葉が現れる。

2. What the hell happened to Maggie?

“Maybe I am different now, Twyla. But you’re not. You’re the same little state kid who kicked a poor old black lady when she was down on the ground. You kicked a black lady and you have the nerve to call me a bigot” ...What was she saying? Black? Maggie wasn’t black.

“She wasn’t black,” I said.

“Like hell she wasn’t, and you kicked her. We both did. You kicked a black lady who couldn’t even scream.”

“Liar!”(257)

施設にいた賄い婦 Maggie は Twyla と Roberta の共謀

によって怪我をしたのだと Roberta によって語られる。しかし Twyla にそのような記憶はまったくない。彼女が他の施設の子供たちに突き飛ばされ、助けを呼ぶことも痛みに泣き叫ぶこともできずにいたのを二人は傍観していたのだ。それなのに何故この人種統合教育を推し進めるようピケをしている時に Roberta はこのような嘘をつくのだろうか?と Twyla は思う。

しかし我々はナレーターとしての Twyla の言葉を信じながら、曖昧な記憶の立場である彼女の事を 100%信じることはできず、Maggie を蹴って怪我をさせたのは本当は Twyla ではないかと考える。泣くことも助けを呼ぶこともできない Maggie を蹴ったのは彼女で、その罪の意識から Twyla は果樹園の場面を夢見るのではないだろうかと思えるのである。Twyla は Black lady である Maggie を蹴ったのではないか。

このやり取りの後、二人はピケを利用して、ピケ用ポスターの文面を二人にしかわからない言葉に変え、相手へ気持ちをぶつける。Twyla は *AND SO DO CHILDREN[have rights.](258)*(子供に選択権がある) という看板を持てば Roberta は *MOTHER HAVE RIGHT TOO(258)*(母親も選択権がある) と送り返し、それに答えて Twyla は *HOW WOULD YOU KNOW?(258)*(どのようにして知ったの?) と返す。そして最後に *IS YOUR MOTHER WELL?(259)*(お母さんは元気?) と Roberta と再会するたびに母親の病気のことを尋ねた言葉を書いた看板を Roberta に見せる。それを最後に Roberta を見かけることはなくなり、Twyla 自身もピケに参加することをやめ二人は会うことがなくなる。

しかし二人が会うことがなくなった後も Twyla は記憶を手繰り寄せながら自分が Maggie を蹴ったという事実はないと言い切る。やっていないという自信がある。が、ただどうしても Maggie が黒人だということは思い出せないでいた。肌の色など考えたこともなかったのである。しかし、

Maggie was my dancing mother. Deaf, I thought, and dumb. Nobody inside. Nobody who would hear you if you cried in the night. Nobody who could tell

you anything important that you could use. Rocking, dancing, swaying as she walked. And when the gar girls pushed her down, and started roughhousing, I knew she wouldn't scream, couldn't — just like me — and I was glad about that.(259-260)

Twyla は Maggie の耳が聴こえないという事実を、幼少時代、自分以外に誰一人いない家で、泣き叫ぼうとも誰にも聞いてもらえない境遇と重ねていたと考えるのである。Maggie が足の障害のためにひよこひよここと歩く姿は自分の母親がダンスに興じる姿と重なり、うまく話せず訴えることができない姿は自分と重なったのだ。

Twyla は Maggie がいじめられる姿を自分の境遇と重ね、自棄的に見つめていたことを認める。

数年後

クリスマスイヴの夜、Twyla はその年は節約を兼ねてクリスマスツリーは買わない予定だったが、これ以上家計は悪くはならないだろうとツリーを探しに街へ出かける。気に入るツリーを探し回りようやく買った後、帰宅する前に休憩しようと立ち寄った珈琲ショップでまた Roberta と再会する。何か言いたそうな Roberta に対し Twyla はただの知り合い程度の挨拶で済ませるつもりが、堰を切ったように Roberta は話だす。

“Listen to me. I really did think she was black. I didn't make that up. I really thought so. But now I can't be sure. I just remember her as old, so old. And because she couldn't talk — well, you know, I thought she was crazy. She'd been brought up in an institution like my mother was and like I thought I would be too. And you were right. We didn't kick her. It was the gar girls. Only them. But, well, I wanted to. I really wanted them to hurt her.” (261)

Roberta は Twyla に謝りたいわけではない。Maggie に対して自分が持っていた感情を伝えたかったのだ。二人は Maggie を蹴ってなどいない。しかし Roberta も Twyla と同じように Maggie があまりにも年若い

て話すことがうまく出来なかったことで、Maggie が狂っている人間のように思えたのである。それは死と隣り合わせで生きる病弱な母親がいつも狂ったように神へ祈る姿、如いては自分と似ていると感じていたのだった。そして Maggie が蹴られている時、Roberta 自身も加害者へ加わり一緒に彼女を蹴りたかったと吐露する。やはり Roberta も Twyla と同じく自棄的に Maggie を見つめていたのだ。自分や自分の境遇を否定したいと考えていたのである。

二人とも Maggie が黒人であったかなかったかということをはっきり思い出せない。ただ、二人とも同じように自分の境遇と母親を憎んでいたのだ。

ここまで読んできた我々は初めに持った問いかけである、二人のどちらが白人であるのか黒人であるのかという<シンボルハンティング>が無駄だったことを知る。Maggie が白人なのか黒人なのかわからないことを通して語る二人の物語であるこのテキストは白人であることも黒人であることも関係ない、親から愛されなかった二人の子供の話だったことを知るのである。

3. Twyla is telling the story of Roberta telling a story.

Framing story

この作品のナレーター（言説）は Twyla であることは言うまでもない。8歳のとき、同じ時期に施設に預けられた Roberta と共有した事柄を時間を経由しながら Twyla の視点で語られていく。

I used to dream a lot and almost always the orchard was there...I don't know why I dreamt about that orchard so much. Nothing really happened there. Nothing that important, I mean. Just the big girls dancing and playing the radio. Roberta and me watching. Maggie fell down there once. (244-245)

Twyla は孤児院で起きたある出来事がわからない。その記憶だけがすっぽりと抜け落ちてしまっているのだ。彼女は何故施設内にあった果樹園の夢を良く見るのだろうか。記憶に思い当たる節すらもない。ただ覚えているのは Roberta と二人で Maggie が倒れ

ているのを一度見たことがあるだけだった。何があったのか。このある出来事が Roberta との再会を繰り返していくうちに思い出されて行くのである。

Twyla は Roberta との再会とその会話から曖昧な記憶の断片をつなぎ合わせ、または補強しながら、実際におきたある出来事を構築していく。

このことから Twyla の記憶から抜け落ちた出来事を導くのと同時に、読者の物語進行を担っている真のストーリーテラー（内容）は Roberta であることが理解できるだろう。

David はこのことについて、この作品は“*It is, indeed, Roberta’s story. Despite the fact Twyla is the narrator of the framing story, it is Roberta who is the master storyteller*”^vであり、“*Twyla does not tell the tale to listeners within the frame, but does implicitly address the ‘outside’ reader by speaking in first person.*”^{vi} という立場を維持し続けながら、“*Twyla’s story only insofar as she tells of her maturation into a competent listener, and it is Roberta’s story that she finally hears.*”^{vii} というテキスト構成をしているのであると述べる。すなわち、“*a framed tale. Twyla is telling the story of Roberta telling a story. There is another level, though: Morrison is telling the story of Twyla telling the story of Roberta telling a story*”^{viii} というプロットが構築され出来上がっているのだ。しかしこの説明も物語終盤クリスマスイヴの再会で言説と内容が逆転する。ストーリーテラーの Roberta が話すことは Twyla の繰り返しであり、Roberta 自身が導いてきたはずの物語内容を“*What the hell happened to Maggie?*”といきなり二人の物語を外へ（読者へ）放り出してしまふ。これでテキストが終わるため、この問いかけを読者は今まで築いてきた Twyla と Roberta から離れ、主題を白人でもなく黒人でもない Maggie に変え構築しなくてはならなくなる。

4. Recitatif & Recitative

テキスト（書字相）と読者

脱構築とは

さまざまな「構造」（「あらゆる種類の、言語学的、<ロゴス中心主義的>、<フィーネー（音声）

中心主義的>、社会 - 制度的、政治的、文化的な、そしてとりわけ何よりもまず哲学的な構造）に働きかけ、いわばそれらを引き受けつつそれらを侵犯するような「両義的」身振りによって、一つの「総体」がいかに「構築」されているかを明らかにすること—それが「脱構築」という否定にも肯定にも属さない作業の意味するところ^{ix}

にある。人が抱える「価値観」（思考）を浮かび上げらせ、生まれてくる問いを一つ一つ除去しさらに深い部分へ、そしてさらに形ではなく痕跡としてあるだろう「空間」部分に潜り込み、回帰できないところで揺さぶりをかけることなのだ。

この作品における「脱構築」過程は明らかに白人・黒人のどちらにでも取れるレトリックを用いた<シンボルハンティング>の作業だった。テキストはテキスト内コンテキストや状況コンテキストなど諸条件以上のことは全て読者の価値観に作用される。上で見てきたように

* “...they never washed their hair and they smelled funny.”

* “...looked down at me and then looked down at Mary too. She didn’t say anything.”

* “Her own hair was so big and wild I could hardly see her face.”

* “Hendrix. Jimi Hendrix, asshole. He’s only the biggest — Oh, wow. Forget it.”

* “Easy, I thought. Every thing is so easy for them. They think they own the world.”

などの言葉は読者それぞれが自分の経験から判断しているのだ。これら上げたものはもちろん私の経験からの判断なので、他の人が俗的な事柄・歴史の流れなどをまったく知らない、またはさらに知っているのならば判断はさらに変わってくるだろう。しかしはっきりと確定された言葉が書かれていない以上、誰が正解とは言えないのである。これは文学作品を読む人間がすべて違う読みをするのと同じで、読む人間の数の分だけいろいろな意見が分かれるのであ

る。逆にこの作品はどう受け止められようとまったく関係ないということになる。なぜならばこの問いかけは物語には必要ないとナレーターが最初に言っていたのである。

“...it didn't matter that we looked like salt and pepper standing there and that's what the other kids called us sometimes.” (244)

我々読者は最初から“salt and pepper”にだけ目をやり、大切な言葉を見落としていたのである。8歳の時の彼女らにとって塩だろうが胡椒だろうがそんなことは関係なかったのである。それをキャラクターらが幼少という理由だけで耳を貸さず、Toniの作品であるということで勝手に人種の物語だと読みを進めてしまったのである。

もちろんこのような問題を捉え間違え、人種の問いかけをした読者側に問題があったと気づかされるのは作品を読み終えてからで、私たちは最後になって無意識下において揺さぶりを見事にかけられてしまったことを知るのである。

脱構築とは揺さぶりをかけられることで現れる自分の価値観を問題化することなのだ。

音声相と書字相

この作品の題名は明らかに Recitative (叙唱・話し言葉のイントネーションを模倣し、または強調する声楽形式) を音声的に発音した時の綴りであるが、Recitative も Recitatif にも意味において差はあるのだろうか。

「脱構築」は二項対立の拠って立つ地盤そのものを問題化するのであり、そのためには、一方で「高位にあるものを引き摺り下ろし、その昇華ないし観念化する系譜学を脱構築するような転倒」を行なうと同時に、他方で「古い体制の内部にももはや包摂されず、かつて一度も包摂されたことのないもの」の「新しい<概念>」の出現を促し、その両者のあいだの隔たりを「二重のエクリチュール」によってしるしづけることこそ必要なのである。^x

ストーリーテラーである Roberta は音声相であり、ナレーターである Twyla は書字相と考えて良いだろう。人種の特定で初めから終わりまで<シンボルハンティング>していく我々読者は、両方の相を持つテキスト (エクリチュール) の中で、いわば宙吊りの状態で人種の価値観を大きく揺らされ続ける。揺らされながら価値観である物事を判断していた優劣の出来事や固定観念、自分の知識を振り落としていくのである。

結論：()の中へ —Be like Parentheses—

人種という価値観を全て振り落とされたのち、我々に見えるものは Maggie に何があったのかという問いかけしか残っていない。Twyla と Roberta の二人がどのように母親に育てられどのように感じて生きていたか。彼女たちは母親を憎く思うのと同時にそれ以上に愛し、再会すれば必ずお互いの母親のことを思いやる。それは同じ哀しみを持つ者同士だからこそできることだった。そして二人の共通の哀しみを映し出し現象したのが Maggie なのである。

黒人・白人、ナレーター・ストーリーテラーの2項に揺り動かされたことで、我々はこの物語自体が意味的な示唆 (人種の特定) を伝達するものでなく、自分らが知らない間に培った価値観の曖昧さを知らされることにあったとわかる。

言葉とは状況コンテキストを利用して

われわれはどんな自明に思える相手の言葉も、その「意」を絶対的に確かめることは不可能である。しかし、つねにそのつど内的な自然な確信としてこれを受けとっており、しかしまたこの確信は、じつはそうではなかったという訂正可能性を原理的にもっている。^{xi}

この訂正可能性が「Maggie に起こったこと」であり、常に Twyla と Roberta が語った物語が進行的にどちらにも発生していく可能性であるということなのである。黒人であるかもしれないしそうでないかもしれない。二人は Maggie を蹴ったかもしれない

し蹴らなかつたかもしれない。泣き叫んでいる姿を見たかもしれないし見なかつたかもしれない。すなわち Maggie に起こったことは過去を遡って発生する前の状態なのである。そして最後に Twyla と Roberta が二人の物語を外に居る我々に放り投げたことによって読者らにとっても何かが発生する前の状態に追いやられたことになる。

ぎこちなくひよこひよここと歩く Maggie のカッコのような脚の中へ—それは既存の価値観を振り落とされたことでどこへ進行もしくは発展するかわからない何かであり、Maggie の歩みのような緊張感と曖昧性の中に取り残されてしまった何かである。

我々はこのテキストを読むたびに、何度も Parentheses の中へ振り落とされ、そこに新しい価値観が生まれようとするたびに、揺さぶり続けられるだろう。どのようにも進める訂正可能性を持ちながら。

Note

ⁱ Wikipedia, the free encyclopedia
<http://en.wikipedia.org/wiki/Deconstruction>
 (15/09/2005)

ⁱⁱ Toni Morrison, “Recitatif” Amiri Baraka & Amina Baraka, ed. *An Anthology of African American Women CONFIRMATION* (New York; William Morrow and Company, INC.1983) pp243-pp261 以後 Recitatif からの引用は全てこの版を用い、ページ数のみを本文中 () 内に表記する。また本文中に記した[]内、下線は筆者が付加したものである。

ⁱⁱⁱ David Goldstein-Shirley, . “Race/[Gender]: Toni Morrison's 'Recitatif.’” Corinne H. Dale and J. H. E. Paine, ed. *Women on the Edge: Ethnicity and Gender in Short Stories by American Women* (New York: Garland, 1999) p97

^{iv}人種統合教育をめざして通学バスによって、統合学校へ黒人学生あるいは白人学生を通学させる⇒必ずしも黒人学生の学力向上につながらず、むしろ白人中産階級の郊外への脱出 (White Flight) を促進した。また黒人児童も近隣住区 neighborhood を離れて遠くの学校に通うことを必ずしも望まなかつた。

「2002/11/07 アメリカ社会概論 4. 人種間関係の展開と現状—黒人問題を中心に」

<http://ccs.cla.kobe-u.ac.jp/staff/yasuoka/WWW/amesha20021107.htm>

(02/08/2005)

^v Goldstein-Shirley, p102

^{vi} 同上

^{vii} 同上

^{viii} 同上, p103

^{ix} 守中高明 『脱構築』(東京、岩波書店、2003年5刷) 7頁

^x 同上 22頁

^{xi} 竹田青嗣 『言語的思考へ—脱構築と現象学—』136頁

Works Cited

Bal, Mieke. *Narratology -introduction to the theory of NARRATIVE* (Toronto: University of Toronto Press, 2002)

Stepto, Robert, *From Behind the Veil –A study of Afro-American Narrative* (Chicago: University of Illinois Press, 1991)

Taylor-Guthrie, Danille, ed. *Conversations with TONI MORRISON* (Mississippi: University Press of Mississippi, 1994)

(Received : September 30, 2005)

(Issued in internet Edition: November 20, 2005)